



様式第8号（第5条関係）

(その1)

令和6年4月30日

十和田市議会議長
石橋義雄 様

会派名 栄の会

経理責任者 山田洋子

令和5年度政務活動費収支報告について

十和田市議会政務活動費の交付に関する条例第7条第1項の規定に基づき、
別紙のとおり令和5年度政務活動費収支報告書を提出します。

(その2)

令和5年度政務活動費収支報告書

会派名 栄の会

1 収 入

政務活動費 1080,000円

2 支 出

(単位:円)

科 目	金 額	備 考
調査研究費	640,025	宮崎県延岡市、高千穂町(行政視察) 308,690 沖縄県浦添市、那覇市(行政視察) 331,335
研修費	60,000	森林・林業・林産業活性化促進十和田市議員連盟(青森県平内町、青森市) 60,000
広報費	42,953	市政報告会に係る会場使用料等 42,953
広聴費	0	
要請・陳情活動費	0	
会議費	0	
資料作成費	0	
資料購入費	0	
人件費	0	
事務所費	0	
合 計	742,978	

3 残 額 337,022円

(注) 備考欄には、主たる支出の内訳を記載する。

調查研究費

(その3)

政務活動報告書

会派名	格の会		
活動議員名（取扱議員名）			
戸来伝	山田洋子	竹島直樹	
区分			
1 調査研究費	2 研修費	3 広報費	4 広聴費
5 要請・陳情活動費	6 会議費	7 資料作成費	8 資料購入費
9 人件費	10 事務所費	※該当する区分に○印	
期間 (年月日)	令和5年7月18日～令和5年7月20日		
支出目的 (支出理由)	令和5年7月19日＜宮崎県延岡市＞ ・健康長寿のまちづくりについて 令和5年7月19日＜宮崎県高千穂町＞ ・インバウンドの受入れについて、観光のPRの方法について		
用務先 (支払先)	宮崎県延岡市、宮崎県高千穂町		
内容及び成果	別紙 視察報告書のとおり		

※領収書及び料金内訳書等の写しは裏面へ貼り付けしてください。

宮崎県延岡市視察報告書

終の会 戸来伝

日時	令和5年7月19日
場所	宮崎県延岡市役所
テーマ	健康長寿の取り組みの視察に基づいた、その成果と課題について
内容	<p>1. 延岡市の健康長寿の取り組み 1.1 健康長寿のまちづくり市民運動</p> <p>延岡市は、2011年から「健康長寿のまちづくり市民運動」を推進している。 この運動は、「1に運動、2に食事、3にみんなで健診受診」をスローガンとし、市民一人ひとりの健康づくりを支援することを目的としている。</p> <p>・主な取り組み</p> <p>健康長寿推進市民会議の設置：市民、医療機関、行政などが連携して運動推進に取り組む。</p> <p>健康増進講座の開催：市民向けの運動教室や食育講座などを定期的に開催。</p> <p>健康診断の受診促進：がん検診や特定健診の受診率向上のための啓発活動。</p> <p>2. その他の取り組み</p> <p>フレイル予防・介護予防：高齢者の自立支援と介護予防を推進。</p> <p>地域医療の充実：地域包括ケアシステムの構築や医療従事者の確保。</p> <p>健康に関する情報発信：ホームページや広報誌を通じて市民へ情報を提供。</p> <p>3. 成果</p> <p>延岡市の健康長寿のまちづくり市民運動は、市民の健康意識向上に貢献している。</p> <p>運動習慣のある市民の割合は、2011年の36%から2023年には45%に増加。</p> <p>ロコモティブ・シンドロームの認知度は、2017年の60%から2023年には67%に増加。</p>

4.まとめ

有効活用されていた取り組みは、健康に関する啓発チラシや動画の制作・配布、健康に関する講演会や研修会の開催、運動習慣の促進、ウォーキングや体操などの健康教室の開催、スポーツイベントの開催、食事改善の推進、食事バランスに関する指導、地元食材を活用した料理教室の開催など、多岐にわたるが、あくまでも市民が楽しくて活動を続けたくなるような、行政が姿勢があった。

我慢させない、この基本の考えがすべてにおいて、職員が考え出来ていた。

十和田市は、延岡市の成果を参考に、市民が参加したくなる、独自の取り組みをさらに発展させていくことが重要であると感じた。

宮崎県高千穂町視察報告書

終の会 戸来伝

日時	令和5年7月20日
場所	宮崎県高千穂町役場
テーマ	高千穂町は、自然景観、神話・伝説、伝統文化など、豊富な観光資源を有する魅力的な観光地である。予算をかけない効果的な行政政策について。
内容	<p>1. 高千穂町の観光について</p> <p>高千穂町は、天孫降臨伝説をはじめとする神話・伝説が数多く残る町である。町は、これらの神話・伝説を観光資源として積極的に活用し、町づくりに取り入れている。また、豊かな自然景観を有する町である。町は、自然景観の保全と活用に力を入れており、以下のような取り組みが行われている。</p> <p>2. 地域住民との連携</p> <p>高千穂町は、観光客と地域住民の交流を促進し、地域活性化につなげるために、地域住民との連携を重視している。具体的には、以下のような取り組みが行われている。</p> <ul style="list-style-type: none">・民泊事業の推進: 地域住民が運営する民泊事業を推進し、観光客と地域住民の交流の場を提供している。・地域産品の開発・販売: 地域住民が生産する農産物や工芸品などの地域産品の開発・販売を支援し、地域経済の活性化に貢献している。・観光ボランティアの育成: 観光客に高千穂町の魅力を伝える観光ボランティアを育成し、地域住民による観光客へのおもてなしを推進している。 <p>3. まとめ</p> <p>高千穂町は、神話・伝説と自然景観を活かした観光行政政策を実施しており、国内外から多くの観光客を吸引している。一方で、交通アクセスや宿泊施設の不足などの課題も抱えていた。観光に予算をかけずに、観光で稼ぐ町づくりが行われており、役場の職員が地域や観光に、深くかかわることにより、おもてなし、観光サービスの充実をはかっていた。マスマディア対応は積極的に取り組んでおり、県との連携が密に行われており、情報発信も県が多くを担う仕組みを構築しており、情報発信も低予算で行っていた。当市の観光でも見習うべきところが多く、観光客の目線での観光地づくりと、稼げる観光地が勉強になった。</p>

健康長寿の取り組みが成功を収めている仕組みを視察

会派、氏名	柊の会 山田洋子
参加者	柊の会 3名 戸来伝、山田洋子、竹島直樹 立憲農民クラブ 3名 久慈年和、今泉信明、太田正幸 明政一心会 2名 工藤正廣、山端博
日程	令和5年7月19日
場所	宮崎県延岡市役所
目的	健康長寿の取組みにおける市民活動と行政施策について

内容

健康について市民活動が活発である延岡市であるが、成果が出ている取り組みをどのように行っているのかについて視察を行った。

延岡市には県立延岡病院があるが、コンビニ受診と呼ばれる受診が多く、夜間救急外来でも同様のため、医師 6 人が退職する事態となった。そのため署名活動が市民から始まり、コンビニ受診抑制の啓発活動が行われ、さらに自分自身が健康管理に努める活動となった。この活動は病院の危機解消後も、目的を変えながら継続されており、市町村として全国初の地域医療を守る条例の制定に繋がり、現在の健康づくりは市民主導となっている。

行政施策を効果が上がるようした基本的な考えに、無理をさせない・我慢をさせない・頑張らせない、長続きする活動である。例えば、「塩分摂取量を 1 日 8g 目標」ではなく「塩分を控えるために減塩食品を選ぼう」「調味料はかけるより付ける」という、実行実践に主眼を置いた考えである。無理があると長く続かないため、日常で実行しやすく習慣付けできる工夫もあり、どうしても頑張ってほしい時は、市民がやってみたいという情報を発信し、楽しむ工夫をしていると説明があった。

特徴的だと感じたものを列挙したのは以下である。

- ・行政の支援もあり、区長(自治会長)を健康長寿推進リーダーにし、長寿推進員を置くこと。
→地域との交流がある、運動習慣がある、この 2 つは密接に結びついていることがデータでえられているため、地域での活動には有効性がある

- ・市民運動活動交付金として、地域の健康づくり活動であれば、ほぼ条件を付けずに支援していること。
→アルコール以外なら何でもよいということで、活動の後のお茶代やお菓子代にも利用されている。交流により参加者が増える、逆に来なくなったり人の情報収集などにも役立っている。

- ・健康づくりの備品購入に補助金を出している。
→グランドゴルフやミニボーリング、血圧計などの購入に 1 区につき 3 回まで補助が出るため、公民館等での運動に使用されている。これは、百歳体操の普及により件数が急増したこと。

・健康学習会を2022年は183回開催しており、百歳体操をはじめ、外部の行使を派遣する人材バンクも好評で、認知症予防ゲームや笑いヨガなどが人気が高いとのこと。参加者は2022年5235人であり、コロナ以前も毎年6000人以上参加している。

→楽しむ工夫をする、周囲を巻き込む、インセンティブを用意する、という基本理念がある取り組みであった。行政主導だと、正しいことを伝え、その情報に基づいて行動変容を期待するが、市民目線に立ちやりたくなる情報を伝える、ということと、無理をさせない、頑張らせないための工夫がこらされていた。

・大人を対象としたポイントがたまる、健康長寿ポイントの取り組み。健康に関する活動や検診受診に対してポイントを付与し、抽選に応募できる制度を年2回行っている。

→当市でもポイントラリーを行っているが、違うところは5万円分の商品券など、ポイントを貯めたくなる仕組みがとられていた。また応募しやすいようにハガキでの応募が出来るようになっていた。応募者の約8割が高齢者であった。

・子どもを対象とした、健康長寿ポイント制の取り組み。各校・園で決めた取り組み意を行い、達成率に応じて図書カードを商品としている。

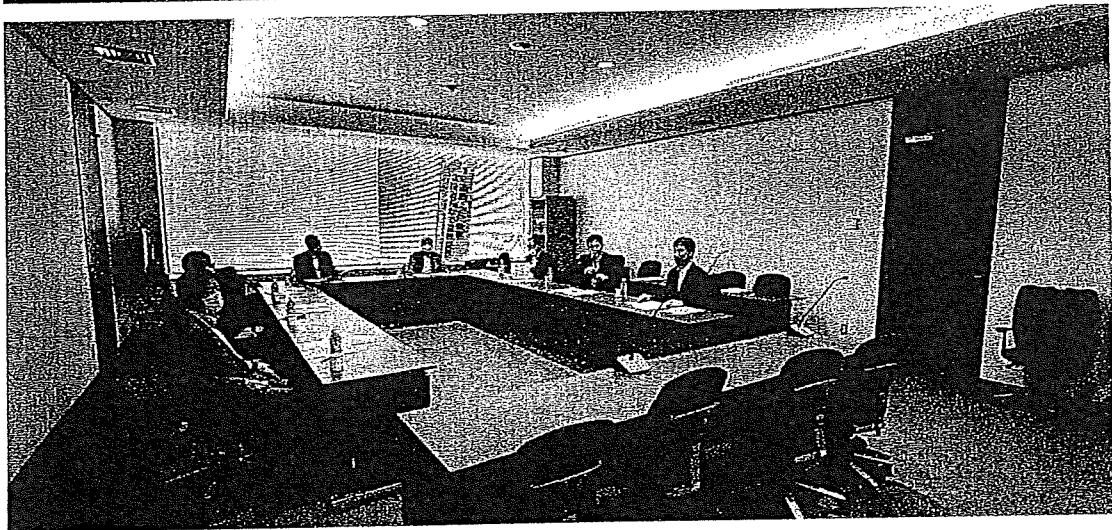
→希望が大きい学校も取り組めるよう、記入式で取り組み達成率の集計をするコースと、集計の必要のない一律3000円分の商品コースを作るなど、多くが参加できるように制度変更も行ったとのこと。子ども自身が健康を意識できることと、賞品で学校図書購入費用に充て、図書の充実を図ることが出来る工夫であった。

・現役世代を対象とした、スマートフォンのアプリによる、健康マイレージ制度。1日の鳳雛によりポイントが貯まる、体重や血圧、体温、検診・健診などの各種記録をすることでポイントが貯まる制度で、40代50代の参加が一番多く、同種の自治体アプリの参加率は人口の2%のところ、1.1%と参加率も高いとのこと。最大の特徴は、貯めた分の1ポイント=1円として、市内加盟店での買い物に理表できるということで、地域経済の循環と健康づくりを兼ねた仕組みを作っていた。

→アプリは多機能であり、このアプリで健康づくりを進めていく方針だということであり、アプリのアンケート機能で、さまざまなアンケートを行い、データとして利活用できるくふうがされていた。月1回の記録は約50%、毎日記録は2%程度おり、利用率も高いと感じた。

問題もあり、特に高齢者の事業の場合は地区ごと（町内会）の活動のため、地区会長に負担が大きいことがあると感じた。健康のためのグランドゴルフやミニボーリングなどの大会をはじめ健康講座の開催など、今後の課題になると考える。

当市では高齢者率が高い水準で今後も推移するが、元気で健康な高齢者を増やすことを主にする政策の有効性について勉強になった。明るく楽しめる工夫について、当市でも検討していくたい。また、無理をさせない・我慢をさせない・頑張らせない、長続きするこの基本理念は健康についてだけではない様々な市民参加への形に繋がっているものであったので、その点についても当市でも活用できるのではないかと考える。



世界的観光地の現在と過渡期への対応についての視察

会派、氏名	柊の会 山田洋子
参加者	柊の会3名 戸来伝、山田洋子、竹島直樹 立憲農民クラブ3名 久慈年和、今泉信明、太田正幸 明政一心会2名 工藤正廣、山端博
日程	令和5年7月20日
場所	宮崎県高千穂町役場
目的	観光でのPR方法について、観光の町として行政の役割負担と地域の連携について

内容

高千穂町は宮崎県内でも随一の観光地であり、平成27年は161万6200人と過去最高になつたが、熊本地震の影響により116万6300人まで減少し、新型コロナウイルスの影響に75万人まで落ち込んでいたが、令和4年は約114万人まで回復している。入込数は回復しているが、滞在型観光地として宿泊客数の増加とインバウンド増を目指している。

独自の政策として注目をしたのは、観光PR方法であった。

町として観光に対する予算が少ないため、そのPRは町ではなく県に依存をしており、宮崎県が国内外に観光を売り込むときには一番初めにPRしてもらえるように綿密な調査を行つていた。国の名勝である「高千穂峡」をはじめ国的重要無形民俗文化財の「高千穂の夜神楽」や、「天孫降臨の地」「皇祖発祥の地」として、それぞれの見せ方やきれいで見える場所などを、綿密に調査し、時間帯でも画像として映える場所などを細かく設定しているところである。この調査により、海外プロモーションは県と連携し、インバウンド客に対しても、きめ細やかな対応がとれるようになっている。

また、この調査が役に立つのは、特にメディア対応であった。予算をかけずにプロモーションするには、ニュースだけでなくバラエティー番組や旅番組、グルメ番組などテレビや雑誌など取材で取り上げてもらうことを主にしていたところである。

最初の企画相談から、ロケハンアテンド・ロケ当日アテンドまで、土日夜間関係なく、ワンストップで職員が対応することである。

メディアにとって、取材しやすい環境を提供できていることで、定期的な取材や、リピート取材に繋がるようにしていた。

例えば、夏の夕方にベストな取材が可能な場所、春の早朝にベストな場所など、細かい要望にも迅速に対応できるところまでは、当市では考えられないほど丁寧であると感じた。

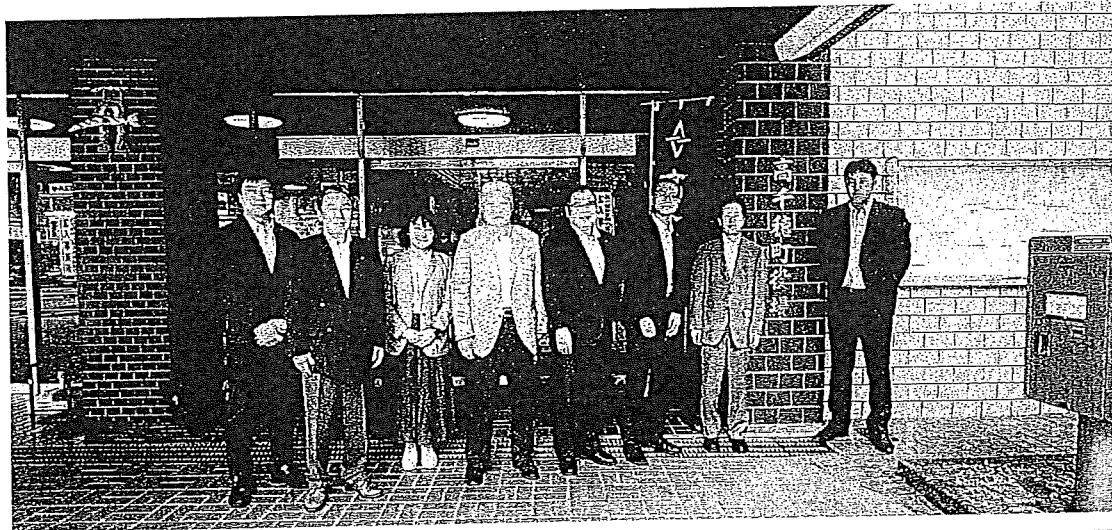
観光に携わる職員は4人ほどであり、その人員の中で観光・商工に関するあらゆる会議などにも対応していると伺い、そのやりがいのある職場づくりにも興味があつたが、それが休日には日本各地の観光地にも足を運び、高千穂ならではの良さを考えているということであった。視察からは、観光地としての優位性ではなく人間性でのPRがあると実感したところもある。

コロナ以降として、新しい時代の観光地としての取り組みを行うという事であった。これは、観光に携わる人手不足や高齢化もあるが、これまでなかった横の連携を取ることで観光人口減少に対応しようとするものである。

また、入れ込み客数での数値目標ではなく、今後はどのくらい稼ぐかを重視し経済水準を一つの目安にして行こうという取り組みである。新たな目標は、観光消費額・宿泊客数・来訪者満足度を目標値に設定しており、満足度にはSDGsや環境にどのように取り組んでいるのかというのが、観光客に選ばれる1つになっているグローバルスタンダードに対応していた。宿泊客数はこれまで10%であったが、今は15%と成果が出ている。その反面、昼食や夕食の場所がない、いわゆる食事難民に対応するのが課題であるという。

また、まちをあげて新たなホテルなどの宿泊施設の誘致活動を行っていると伺った。宮崎県外の資本を導入し魅力ある観光地になるよう、目標が明確であり、観光経済水準の向上に向か、大変勉強になる取り組みであった。

当市と同じように、観光に対する予算がないにもかかわらず、マンパワーで進んでいるところも、勉強になるところであった。



視察報告書

終の会 竹島直樹

日時 令和5年7月19日

場所 宮崎県延岡市

視察項目 健康長寿のまちづくり市民運動について

内容所感

県立延岡病院では平成20年～21年にかけて医師6人が大量に退職した。大きな理由は救急搬送件数の急増による医師の負担増加である。この危機に対して市民運動の機運が高まり、医師確保を求める署名活動が始まり、近隣自治体からの署名も含めると延岡市の人口を超える15万にも達しました。結果として夜間・休日の受信数は半減し、地域医療を守ったモデル的な例として厚生労働省の専門会議でも取り上げられました。

平成21年に全国の市町村で初となる「延岡市の地域医療を守る条例」を制定しました。条例で掲げている4つの理念は

1. かかりつけ医を持つ
2. 通常の診療時間内に受診する
3. 医療従事者への感謝の気持ちを持つ
4. 日頃から健康管理に努める

この理念は市民が普段から健康に気をつけることで救急搬送や入院する機会を減らし、医療従事者の負担を減らそうという趣旨である。

県立延岡病院の研修医はずっと0名が続いていましたが、中高生向けの地域医療を支える人材育成講演会などの様々な取組を続けてきました成果として、令和4年度は6名の研修医が所属、令和5年度は4名の研修医が所属予定となりました。

平成22年に延岡市健康長寿推進市民会議が発足し、すべての活動の母体となり健康長寿のまちづくり市民運動行動計画を策定し、健康長寿の延伸や医療費の抑制ではなく、地域医療の体制の維持を運動の目的としていて、素晴らしいコミュニティを作りあげることが健康長寿のまちづくり活動を通してのゴールの姿となると市民会議発足時の議事録にあります。

具体的な市民運動の取組としては、地区などで行われる健康学習会は、外部の講師を派遣する人材バンク制度が人気があり、最も多いのは認知症予防ゲーム、次に笑いヨガとなっており、地域ではいきいき百歳体操、グランドゴルフ、ミニボウリングの順に取り組まれ、食事の取組としては、減塩を中心とし市内のゆるキャラである「のぼるくん」を減塩大使として活用しています。あと、特定健診の受診率の向上や健診未受診者の対策事業や認知症予防への取組、のべおか健康長寿ポイントやのべおか健康マイレージを実施して、地域経済の循環と健康づくりを兼ねた仕組みとなっています。

市民運動の成果としては、運動習慣のある人の増加や要介護認定率の低下などがあり、和田市でもすぐに取り組める事例でありますので参考にして活用ていきたいと思います。

日時 令和5年7月19日

場所 宮崎県高千穂町

視察目的 観光PRの方法とインバウンドの受け入れについて

内容所感

高千穂町の面積は、237,54平方キロメートルで、そのうち林野面積（国有林面積含む）が占める割合は約84.1%、田畠面積が占める割合が約8.2%、宅地面積が占める割合が約1.8%である。高千穂町の人口（令和5年1月1日現在）11,328人、世帯数4,927世帯、高齢化率42.26%で、過疎化、高齢化率が進んでいる。高千穂町は大正9年（1920年）に町制を施行し、昭和31年に岩戸村、田原町が合併、昭和44年に上野村が合併し現在に至る。2020年に町制施行100周年を迎えた。高千穂町は、九州のほぼ中央部、宮崎県の北西部に位置し、町の中心部を名勝「高千穂峡」有する五ヶ瀬川が西北から南東にかけて貫流し、熊本県と大分県の県境には、宮崎県最高峰の「祖母山」がそびえる観光名所である。標高は約300～800メートルで寒暖の差が大きく、初夏は新緑、秋は紅葉、冬は雪景色と四季折々で違った景色が見られます。国の名勝「高千穂峡」をはじめ景勝地が多数あり、また天孫降臨の地として、神話や伝説にまつわる場所や史跡が数多くあり、古くから伝承されている「高千穂の夜神楽」は国的重要無形民俗文化財にも指定されています。この景勝地や史跡、伝統文化などを求め、多くの観光客が訪れます。山間部で平地の少ない中山間地域で、その特徴を活かした複合経営型農業が行われており、米や野菜、果樹、お茶、花き、椎茸、牛肉など、品質のよい農林畜産物が多品目生産されています。2015年「世界農業遺産」に認定、2017年には「ユネスコパーク」に登録され、2つの世界ブランドを有しています。

新しい時代の観光地を目指して、令和5年度から9年間の観光マスタープランを改定し、基本目標として、暮らし、文化、自然を紡ぎ、チャレンジを通じて次の世代に思いを繋ぐ神話の里高千穂、そしてオール高千穂で変化し続ける持続可能な観光地域作り、これまでのマスタープランを一新し、観光入込客数の数値目標を捨て、経済水準を追い求めていく「稼ぐ」観光を目指し、新たに観光消費額・宿泊客数・来訪者満足度を目標値に設定した。

新しい観光コンテンツ開発の動きとして、高千穂鉄道跡地を活用した公園整備を検討し、新たな観光需要を生み出し地域との連携や交流による地域活性化を目指す。高千穂町とJRグループ鉄道情報システム、旅館業組合で包括連携協定を締結し、町内にある宿の一元化に取り組み、高千穂町が誇る豊かな自然や景観を観光へ活かすため、2020年9月に「高千穂アドベンチャーツーリズム協議会」を設立し、アウトドアアクティビティの開発、商品化がスタートした。稼ぐまちづくりを目指し、2020年6月に地域商社「高千穂まちづくり公社」が設立され、物産の振興、販売はもとより、将来的には観光情報の高度発信化も目指すという。高千穂峡も十和田湖と同じ通過型の観光地で悩み新しいチャレンジを始めたのを聞き、十和田市にもある南部切田神楽や南部駒踊などを活かし、何とか滞在してお金を落としていってもらうための工夫を見習わなければならぬと思いました。

(その3)

政務活動報告書

会派名	松の会			
活動議員名（取扱議員名）				
戸 来 伝	山 田 洋 子	竹 島 直 樹		
区分				合計金額
1 調査研究費	2 研修費	3 広報費	4 広聴費	
5 要請・陳情活動費	6 会議費	7 資料作成費	8 資料購入費	331,335 円
9 人件費	10 事務所費	※該当する区分に○印		
期間 (年月日)	令和5年10月31日～令和5年11月2日			
支出目的 (支出理由)	令和5年10月31日<沖縄県浦添市> ・障がい福祉関連複合施設「ピアラル浦添」について 令和5年10月31日<NPO法人 子どもの広場 in 那覇> ・NPO法人「子どもの広場 in 那覇」の取組について			
用務先 (支払先)	沖縄県浦添市、沖縄県豊見城市			
内容及び成果	別紙 視察報告書のとおり			

※領収書及び料金内訳書等の写しは裏面へ貼り付けしてください。

浦添市障がい福祉関連複合施設「ピアラルうらそえ」視察報告書

格の会 戸来伝

日時	令和5年10月31日(火) 11:00
場所	障がい福祉関連複合施設「ピアラルうらそえ」
テーマ	乳幼児期から成人期までの障がい児(者)に対する一貫した支援と地域相談支援強化を目指した複合施設である。幅広いニーズに対応するための施設運営や連携等を視察する。
内容	<p>1. 業務内容</p> <p>1.1 児童発達支援センター</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 乳幼児健診での小さな疑問や発達段階で気になるところなどへの相談 ・ 発達障がい児の療育や学習支援 ・ 親子遊びを通して子どものからだや心の育ちを促す教室 ・ <p>1.2 障がい者(児) 基幹相談支援センター</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 障がい児(者)や家族に対する相談支援 ・ 関係機関との連携 ・ 各種手続きの支援 ・ <p>1.3 親子通園型発達教室</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 発達障がい児と保護者が一緒に通う教室 ・ 親子間のコミュニケーション促進 ・ 社会性の育成 ・ <p>2. 利用者の声</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「発達障がいの有無にかかわらず、誰もが気軽に相談ができる、通うことができる」 ・ 「子どもの乳幼児検診での小さな疑問や発達段階で気になるところなど、気軽に相談ができる」 ・ <p>3. 感想</p> <p>ピアラルうらそえは、乳幼児期から成人期までの障がい児(者)に対する一貫した支援と地域相談支援強化を目指した複合施設であり、児童発達支援センター、障がい者(児) 基幹相談支援センター、親子通園型発達教室の3つの機能を備え、幅広いニ</p>

	<p>ズに対応している。</p> <p>十和田市には、ピアラルうらそえのような多機能な複合施設はありません。しかし、複数の施設が連携して、障がい者（者）や家族への支援を行っています。</p> <p>しかし、乳幼児期から成人期までの障がい児（者）、子育てに不安を感じている保護者、家族までを対象とし、学習から病院、生活まで、安心できる場所を提供し、支援が必要な時は提供するような、一貫した連携について、家族や地域での見守りも含め勉強になった。</p> <p>今後、十和田市においても、連携に責任をもった支援をする機能を強化していく、そのような視点を持つべきだと考えさせられた。</p>
--	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

一般社団法人「子どもの広場in那覇」 視察報告書

終の会 戸来伝

日時	令和5年10月31日(火)15:00
場所	一般社団法人「子どもの広場in那覇」
テーマ	子供の貧困に対して、支援方法や内容を視察する 活動内容：放課後児童クラブの運営、子育て支援事業、地域イベントの開催
内容	<p>1.運営状況</p> <ul style="list-style-type: none"> • 職員は、保育士、社会福祉士、元教員などで構成されている。 • 利用者は、主に小学校1年生から6年生までの児童である。 • 予算は、行政からの補助金、寄付金、利用料などで賄われている。 <p>2.課題</p> <ul style="list-style-type: none"> • 運営費の確保 • 人材確保 • 地域との連携強化 <p>3.視察内容:</p>

法人概要説明、施設見学、活動内容説明、質疑応答

4. 感想

一般社団法人「子どもの広場 in 那覇」は、地域の子どもたちの健全育成と地域社会の活性化に貢献していることが確認できた。十和田市と比較すると、運営規模は小さいものの、地域との連携を重視した活動を行っていることが特徴である。

今後、十和田市は、以下の点に留意して、子どもたちの健全育成と地域社会の活性化に取り組むべきである。

- 地域のニーズに合わせた多様な放課後児童クラブや子育て支援事業の運営
- 民間団体との連携強化による運営効率化
- 地域住民との交流機会の創出

これらの取り組みを通して、十和田市を子どもたちが安心して暮らせる、活気あふれる地域へと発展させていくことが期待される。

浦添市障がい福祉関連複合施設「ピアラルうらそえ」視察について

会派、氏名	柊の会 山田洋子
参加者	柊の会、立憲農民クラブ、明政一心会、計8名
日程	令和5年10月31日(火) 11:00~12:30
場所	沖縄県浦添市障がい福祉関連複合施設
目的	幼少期から成人期までの障がい児(者)に対する一貫した福祉・保健・医療の継続支援を勉強し、「誰もが安心して暮らせる福祉のまちづくり」にどのような体制で取り組んでいるのか、その現状と対策について勉強するため

内容

ピアラルうらそえは4階建て施設であり、その中に福祉・保健・医療の支援が行えるため、子育てに悩む保護者が気軽に相談できる場であり、幼少期から地域移行支援まで一貫して支援が出来る施設である。施設は、浦添市が指定管理者として委託した医療法人へいあんと、浦添市社協が共同で運営する。

1. 2階：児童発達支援センター「たんぽぽ」（福祉型）について

※利用にあたっては、専門医の認定を受けた、通所受給者証の申請が必要

- ・児童発達支援

小学校就学前の障がいのある子どもに対し、日常生活における基本動作の指導など、集団生活への適応に向けた訓練を行う。

- ・保育所等訪問支援

保育所、学校など集団生活を営む施設を訪問し、障がいのない子どもとの集団生活への適応のために専門的な支援を行う。

- ・相談支援

児童発達支援や保育所等訪問支援などの障害児通所支援サービスを受けるためには、児童の心身の状況や環境、保護者の意向などの事情を勘案し、利用するサービスの種類・内容を記した「障害児支援利用計画」の作成を支援している。また、サービス開始後、一定期間ごとにモニタリングを実施し、利用状況の確認や利用計画の変更を行う。

2. 3階・4階：障がい者（児）基幹相談支援センター「てだこの森」について

浦添市役所障がい福祉課にある浦添市障がい者（児）基幹相談支援センターもこの施設に移転している。

- ・総合相談・専門相談

障がい者（児）の生活全般における相談支援を行い、ニーズに応じて専門的な相談支援を実施。

- ・地域の相談支援体制の強化の取り組み

相談支援事業者へ対しての専門的指導や助言、相談支援事業者の人材育成を行い、相談機関との連携強化の取り組みを行う。

- ・地域移行・地域定着に向けた取り組み

社会的に入院・入所を余儀なくされている方が地域で安心して生活できるような体制を整える手伝いをし、地域生活への移行や定着を促進する。

- ・ 権利擁護・虐待の防止の取り組み

虐待や権利擁護に関する相談窓口として、家庭や施設で虐待を受けている障がい者の相談支援・ご本人の代わりに各種契約などのサポートを行う。

- ・ 自立支援協議会の運営

地域の関係者が集まり、個別事例から地域課題を抽出・共有し、その解決に向けて協議する自立支援協議会の運営を担う。

2. 3階：親子通園型発達教室「そだちのひろば うぐいす」について

子どもの育ちや発達に心配がある、子育てに不安を感じている保護者が、親子遊びを通して楽しく関わり方を学び、子どものからだや心の育ちを促す教室。
子どもが就学に向けた教室を行っている間、親も子育てについて学びつつ不安を解消する場となり、保護者同士での交流を図る場となっている。

3. 4階：発達相談クリニック「そえ～る」について

発達相談（療育相談）を行い、主に未就学児の発達支援を目的としている。小学校6年生までが対象。中学生以上の場合は、精密検査や投薬が必要となる場合が増えるため、専門は精神科・心療内科クリニックである。クリニックでの主な対象は以下のようになっていた。

- ・乳幼児健診からの紹介：医師・保健師・心理士の方から受診を勧められた場合
- ・保育園・幼稚園・こども園・小学校から受診を勧められた場合
- ・お子さんの「ことばの遅れ」「落ち着きがない」「やりとりが一方的」
- ・保護者の方が子育てに関しての不安が大きい場合
- ・他のクリニックからの紹介など

4. 感想

発達障害児に対しては、当市での保育事業や教育現場でも、専門知識のある指導員の増加が望まれており、またその他の障害においても、行政として一貫した寄り添いを実現するための人員確保や人員の育成においても課題が大きいため、当市として大いに勉強になると、この事業の視察を行った。

医療、福祉施設に加えて、発達障がいと診断されていない子が通える教室が常設されているのが、この施設の特徴であり、先進事業であった。

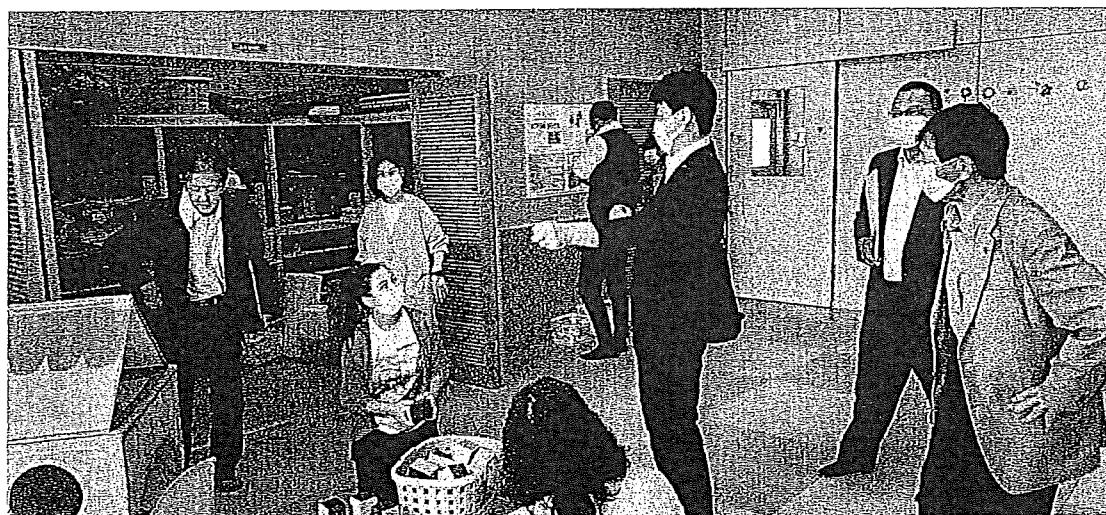
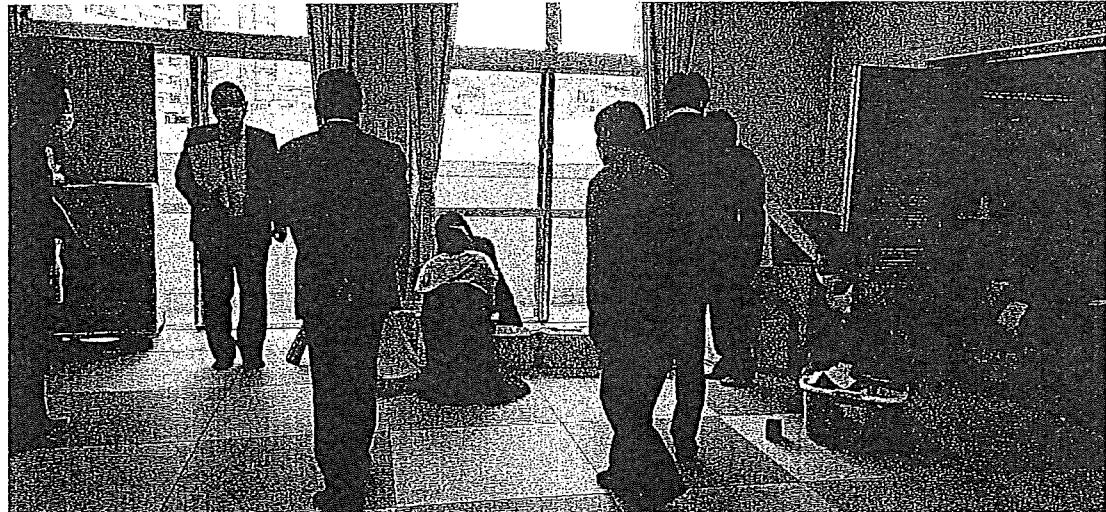
施設の利用には、浦添市に住所を有する児童や、浦添市に住所がある園に通園しているという制限があるが、電話相談から面談や診察に至るまで、2か月～半年待つ場合もあり、早期にかつ相談に来た方は断らないという方針のもと、来年度は1クラス増設するという。

この増設に対し、人員確保や人材育成について質問すると、やはり人材が大変だという事であった。ただ、相談件数も施設利用希望者も増加しており、1年目は5.6人であったが、翌年は50人以上に増え、現在も増えていることを考えると、断らないという信念のもと、自立支援協議会に各分野から参加してもらい、連携して行っているという事であった。

当市でも自立支援協議会は設置されているが、中学校区単位の手の届く日常生活圏域での支援を行える相談センター、発達障害支援、子育て支援、保護者支援にも一貫したサービスを行っているところの充実が当市との違いであった。

障害が有る無しにかかわらず、子育てができ、安心した生活を行える社会は、子どもから高齢者までが暮らしやすい社会であると実感した。

本市でも高齢者と地域との連携や包括支援、障害者と地域との連携が進んでいる。ここに幼児・就学児・発達障害相談者を含めた支援を行うためには、どう行えばよいのか、人材の育成について、またこのような一貫した施設について今後議論を深めていきたい。



一般社団法人「子どもの広場 in 那覇」視察について

会派、氏名	格の会 山田洋子
参加者	格の会、立憲農民クラブ、明政一心会、計8名
日程	令和5年10月31日(火)15:00~16:30
場所	沖縄県豊見城市我那覇公民館
目的	子ども食堂をほぼ毎日運営し、日中と夜の子供の居場所づくり、学習支援、困窮者支援を行っている現場を見学し、その活動内容と組織作り、活動運営に対しての行政としての支援体制についての視察を行う

内容

沖縄県の貧困児童の割合はワースト1位、日本全国平均の2倍であり、行政だけでなくNPO法人などの活動も活発である。学習支援や居場所の提供等、幅広い支援を行っているが、当市でも子供の貧困や居場所づくり、ヤングケアラーへの対応などの要望があり、要支援者は表に現れている数よりも多いと推察されている。どのように支援体制を整備していくのか、現場を通して必要な行政サービスは何かを視察したいと考えた。

那覇市と豊見市の2か所を運営しており、豊見市の我那覇公民館を視察した。

1. 活動内容

○学習支援教室（無料） 子どもの学習を助け、得意分野を獲得する場として火曜から金曜日（那覇教室）、火曜から土曜まで（我那覇教室）の午後2時から6時は宿題やドリルなど、興味のある子は漢字・算数検定を目指す。大学生の有償ボランティアが指導をしている。

○プログラミング教室（無料・予約制）

火曜と木曜（那覇教室）、水曜と土曜（我那覇教室）の午後6時から8時までドローンや3Dプリンターを使ってプログラミングを学ぶ教室。専門スタッフやボランティアが指導を行う。

*専門スタッフは企業からの派遣であり、企業側はプログラミングの人材育成で参加している

○子供の居場所として（無料）

午後5:00から食事ができる。3歳から中学生までの子どもたちの食べたい子たちに無料でおやつと食事を提供。大人も子供連れで一緒に食べられる。休日は昼食から提供している。

那覇教室では、子どもの居場所のために夜間も教室を開いている。

○困窮者支援の活動拠点として

困窮者向け弁当配達事業を行い、お弁当だけでなく、助成事業情報、補助事業情報、支援事業情報を提供し、情報がなかなか届きにくい家庭に確実に必要な情報を届ける活動をしている。

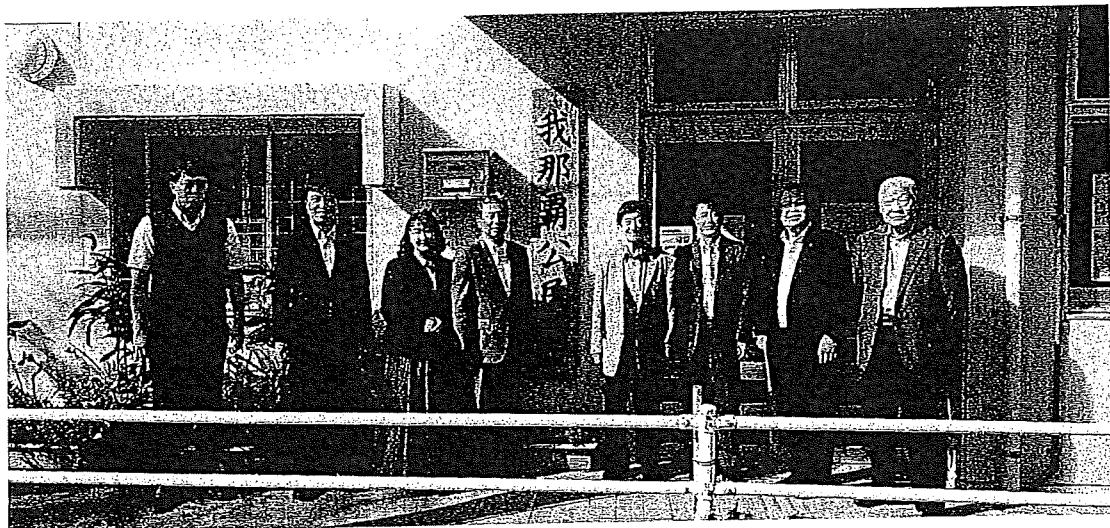
2、感想

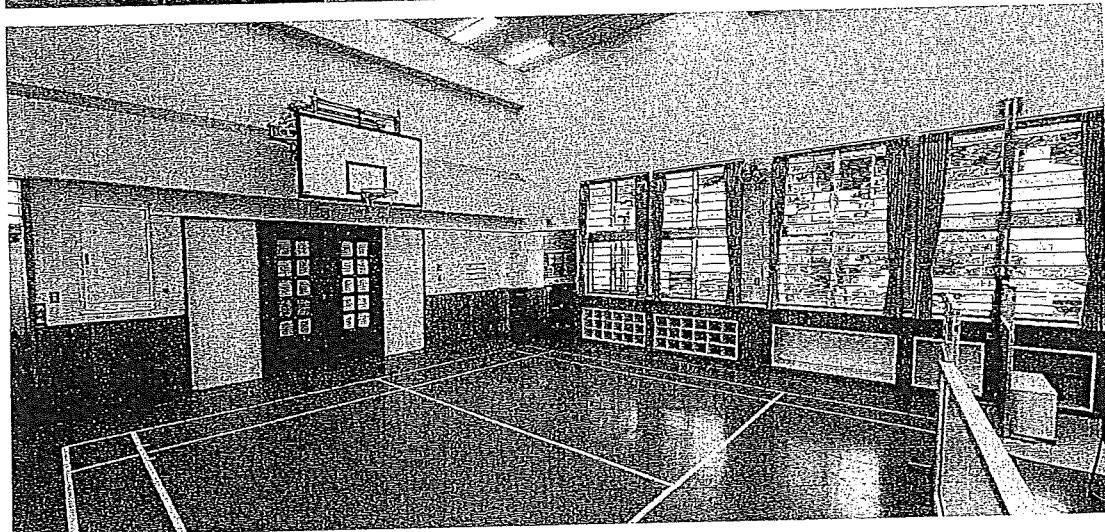
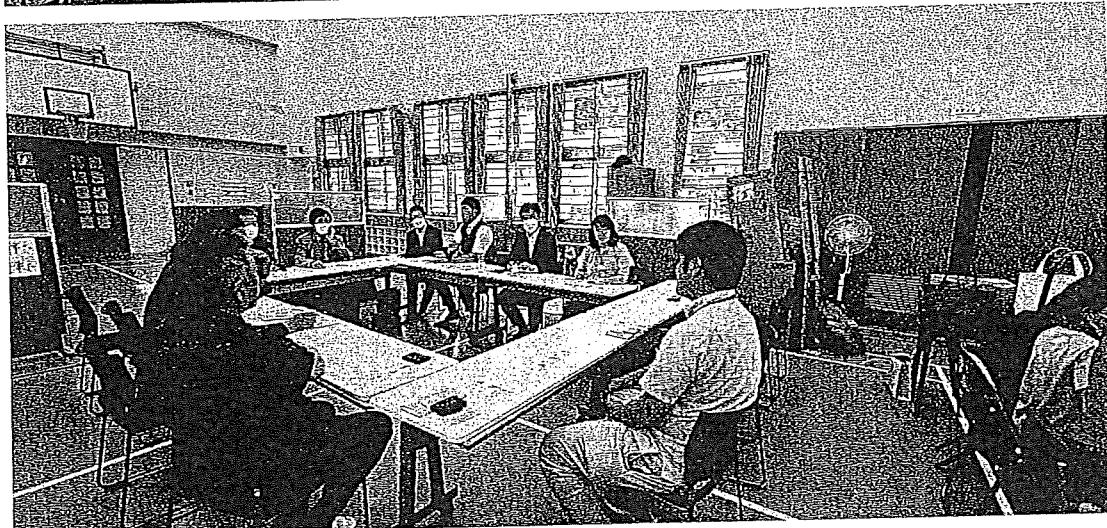
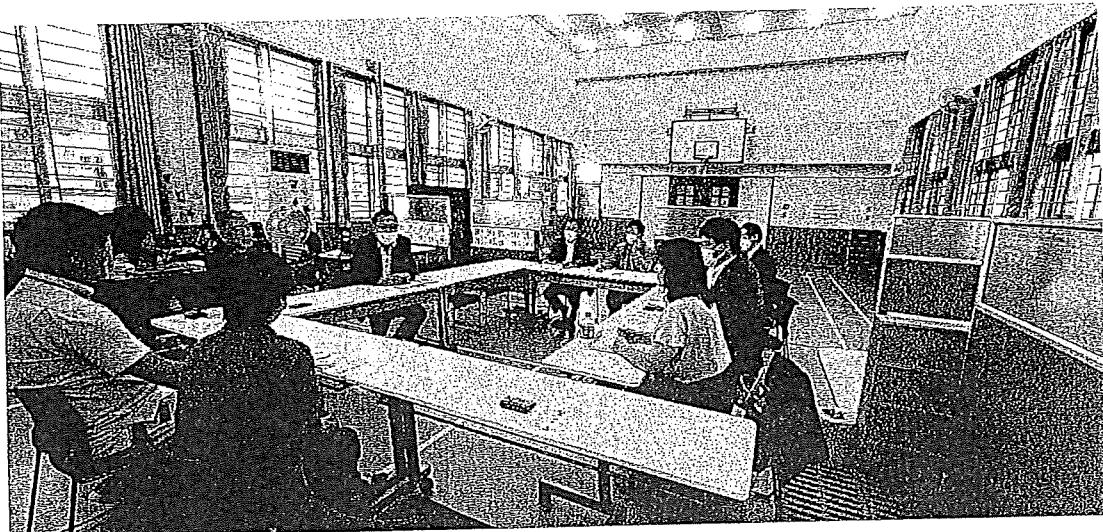
運営について、2015年に始めた時は近所の子供5・6人を対象に子ども食堂をボランティアでしていたが、子どもの口コミで翌年は50人を超す利用者があり、個人での活動では負担が大きくなり、また休日の昼食にも困る子供、夜間一人でいる子供など、子どもの事情に合わせ活動が広がった。

活動が広がるにつれ他団体も子ども食堂を開始し、情報交換や行政手続きなどを共同で行うため、この団体の代表が2021年3月4日特定非営利活動法人困窮者支援ネットワークとして、新たな組織を作り法人化した。各団体が、毎日子ども食堂を開きたいが、スタッフの不足や、活動を始めた方の高齢化などにより、週3回、5回開催するところも増えたという。子ども食堂以外の委託業務も増えたことにより、市や県、国の関係機関との書類作成や行政手続きなどを、法人で行えるメリットは大きいというお話を聞きました。

団体代表の方から、もし十和田市で子ども食堂をやりたいという方がいたら、運営方針や運営方法など細かい所は一先ず置いておいて、まずは支援と応援をすることと行政との橋渡し役をしてほしい、という話であった。民間企業ではないボランティア活動として行う際には、行政手続きはハードルが高く、書類の作成だけで何回も役所に足を運ぶという苦労があったためだという。また、子ども食堂を始めると、貧困家庭だけではない子供の参加もあるが、食堂が毎日開かれていることで、自然と貧困家庭の子供や居場所のない子供だけが残っていくということであった。

いろいろな団体をまとめるネットワーク法人を作ることでのメリットを伺った。中間管理機構のような活動が、各団体の活動を子供に集中させるためには必要であるところに、今後十和田での活動が広がった際での活用につながると考えさせられた。当初は運営の困難なところや各子供の問題などの解決の繋がればという考え方で視察でしたが、運営を長く続けるための努力には、やはり行政と連携して広域での視点が必要であり、市民活動を活発にするかは行政の方針も大きく作用しているところに、今後の方針があると感じた。





視察報告書

柊の会 竹島直樹

日時 令和5年10月31日

場所 沖縄県浦添市

視察項目：障がい福祉関連施設「ピアラルうらそえ」

ピアラルうらそえの概要

発達障がいに対する社会的な理解が進み、行政に対して相談や支援を求める市民の声が大きくなる中にあって、浦添市には総合的かつ専門的な相談支援を行う窓口がなく、親の会など市民から、幼少期から成人期まで一貫性のある継続した相談支援ができる拠点施設の整備を求める声が寄せられていた。また、親子通園による通所事業のみならず、地域で暮らす障がいを持つ子どもや家庭への相談、関連施設への援助など地域支援の強化を図る児童発達支援センターの設置に関して、国の基本指針に基づき進めていく必要があった。

浦添市は人口 114,000 人で 2030 年まで微増していく傾向にあり、年間出生数は 1,200 人、人口千人当たり全国平均（6,57 人）よりも 4,00 人多くなっているが、年少人口・生産年齢人口の減少は一昨年頃から始まり、福祉サービスを必要とする世帯数は増加しており、今後ますます母子保健と児童福祉の向上を推進しなければならない都市といえる。浦添市の第 4 次障がい者プラン（平成 30 年）には、「障がい福祉計画は、子ども・子育て支援事業計画と連携して推進する」とあり、乳幼児検診から児童発達支援につなぐフォローオン体制の構築を図るとの方向性が示されている。浦添市の乳幼児検診受診率の平成 30 年度実績は、乳児健診 93.2%（県平均 89.9%）、1 歳半健診 92.3%（90.6%）、3 歳児健診 92.1%（89.4%）と高い一方で、健診後に保健師が発達をフォローする割合は、1 歳半 17.8% に対して 3 歳児健診ではむしろ 26.8% と上昇している。スクリーニングの機能が果たせているか課題があるため、早期発達支援体制を整備する必要がある。

施設の概要

目的 障がい児に対する幼少期から成人期までの一貫性のある継続支援及び地域の相談支

所在地 浦添市牧港4丁目5番10号

開所年月日 令和3年4月1日

建物概要・構造 鉄筋コンクリート造（地上4階）

・床面積 2,014.15 m²

• 敷地面積 1 884 24

170-236-893 四 工事費

販賣管理及び行と業務の概要

指定管理者が行う業務の概要

令和3年4月1日から令和8年3月31日までの指定管理者に医療法人社団信恵会が運営する、精神科病院の業務を実施する。

法人浦添市社会福祉協議会共同企画体が指定される。業務の概要は以下の通り

児童発達支援センター事業に関すること。

障がい者基幹相談支援センター事業に関すること。

親子通園型発達教室の実施に関すること。

就了通園室児童相談室をつくり、医療法人へいあんの自主事業として発達相談クリニックそえーるを令和4年6月に開院した。

運営にあたっての理念及び基本方針

浦添市は平成20年に「子どものまちでだこ宣言」、平成27年に浦添市から子どもの幸せを最優先にする地域社会を作るとの主旨で「てだこキッズファースト宣言」をしている。その浦添市で、医療法人へいあんは50年以上前から精神科医療に従事してきたが近年は発達障がい診療と家族支援に積極的に取り組み、付帯事業として相談支援事業所を構え、対象者がいから子育て世代、高齢者まで幅を広げている。医療法人へいあんの理念は「病院内の活動から、地域とつながり交流を広げる」としている。一方、福祉分野をリードしてきた社会福祉法人浦添市社会福祉協議会は「障がい児通所支援事業所たんぽぽ園」における療育等、子どもの発達支援と家族支援に尽力してきた歴史がある。「誰もが安心して暮らせる福祉のまちづくり」を基本理念に掲げている。

ようち、うらそえは、「第4次てだこ障がい児プラン」に示されている基本理念「ともに支
ピアラルうらそえは、「第4次てだこ障がい児プラン」に示されている基本理念「ともに支
え合い、ともに喜び輝く、てだこの都市」を実現するために次の理念を掲げる。

【ピアラルうらそえの理念】

「子ども・利用者一人ひとりの喜びをなによりも大切にし、幼少期から成人期までの一貫性のある継続支援および地域の相談支援の強化に努めます」

【基本方針】

すべては、子ども・利用者一人ひとりの喜びのために

1. 家族の多様な願いを理解して、信頼関係を築きます。
 2. 子育て世代が、ここに住んで幸せを感じるまちづくりを目指します。
 3. 療育・相談・地域支援・人材育成のための中核的な施設として機能します。
 4. 職員がねぎらいあって、誇りを持って働くことができる運営に努めます。

考察能

ピアラルうらそえは「児童発達支援センター」「基幹相談支援センター」「基幹相談支援センター」「親子通所型発達教室」「発達相談クリニック」からなる複合施設として展開しているが、十和田市もすでに手がけている事業を活用し、地域相談、地域支援、地域の支援体制整備に複合施設を整備して、基幹相談支援センターに「子どもの発達相談窓口」を設置して、市内の障がいを抱える子どもの状況を把握して体制整備していく試みをしてみたらどうかと感じました。

研修費

(その3)

政務活動報告書

会派名	格の会			
活動議員名（取扱議員名）				
戸 来 伝	山 田 洋 子			
区分				合計金額
1 調査研究費	2 研修費	3 広報費	4 広聴費	
5 要請・陳情活動費	6 会議費	7 資料作成費	8 資料購入費	60,000 円
9 人件費	10 事務所費	※該当する区分に○印		
期間 (年月日)	令和5年8月9日～令和5年8月10日			
支出目的 (支出理由)	森林・林業・林産業活性化促進十和田市議員連盟 令和5年8月9日＜青森県平内町 青森県産業技術センター林業研究所＞ ・施設概要について ・主な研究成果について（スギ花粉症対策品種開発、森づくりの低コスト化技術など） 令和5年8月9日＜青森県青森市 森林博物館＞ ・施設見学			
用務先 (支払先)	青森県平内町 青森県産業技術センター林業研究所、 青森県青森市 森林博物館			
内容及び成果	別紙 視察報告書のとおり			

※領収書及び料金内訳書等の写しは裏面へ貼り付けしてください。

森林・林業・林産業活性化促進十和田市議会議員連盟研修会について

山田洋子

■日 程:令和5年8月9・10日

研修事項:(1)青森県産業技術センター 林業研究所
(2)青森市森林博物館

(1)青森県産業技術センター 林業研究所

上野森林資源部長他 2名にご説明を頂いた。

・施設概要について

・主な研究成果について

林業研究所は、森林の施業や環境、森林病害虫の防除、無花粉スギやヒバの新品种開発、県産材の利用拡大のための製材品製造技術、きのこ等の特用林産物の栽培などに関する研究を行っている。

その中でも、スギ花粉対策の研究について詳しい説明を頂いた。

現在の花粉症のうち、9割がスギであり、青森県内では杉は20%程度である。この研究所では、そのスギ花粉を減らす品種開発を行っており、無花粉、低花粉、特定母樹等の開発を行っている。もともと自然に生育していた花粉のできない「無花粉スギ」を人工交配することで、品種改良し成長や材質も優れた種にし、それを十和田市にあるほ場にて試験研究を行っていた。

また、花粉症対策として、スギを広葉樹であるヒバやカラマツへ樹種転換を行っているという。県内の造林に使用される苗木の7~8割は十和田ほ場産種子から生産されていた。

また、高付加価値栽培技術に関する試験・研究開発の1つとして、主に冬季に栽培・販売されるシタケ農家の要望で、夏季に収穫販売できる新品種のきのこの開発について、説明を頂いた。

数年前から「青森きくらげ」として一般消費者からも人気のキノコ開発についての説明であったが、きのこの種菌供給や生産技術指導により、栽培技術の安定があることが勉強になった。このような林産物の消費拡大により、県産材の需要拡大を図ることにもなり、県内の生産者へ新しい技術が広まる、また生産者にとっても利益が出せる品種があることで安定供給にもつながるという。

森林の公益的機能を守る病虫害対策や生産性を高める製材技術、各種技術の実証実験についてなど、幅広い分野での内容の濃い視察が出来た。

東日本大震災以降、出荷制限がかかっていた県産野生きのこについて、放射性物質の測定分析等を行っている話もあったが、放射性物質の影響について、また松くい虫の状況について、また青い森林業アカデミーにおいて現場技術者を育成する研修事業について等々、より詳細な視察を行えなかつたことは残念であったが、林業研究所十和田市ほ場の役割についても勉強になった。

(2)青森市森林博物館

R4年5月20日 林業遺産に認定された博物館内を案内して頂いた。

青森を軸に、森林と人間の結びつきをテーマとした博物館は、旧青森営林局庁舎のままであり、1908(明治41)年に竣工したルネッサンス式の木造2階建て建築物であり、構造材から造作材、外壁に至るまで本県津軽、下北地方のヒバ材によるものである。青森営林局は、青森・岩手・宮城の3県にまたがる広大な国有林経営の中核的施設であり、貯木場と製材所、津軽森林鉄道が併設する国内最大規模の林業拠点として、青森ヒバの流通に貢献し、地域の発展を支えたという。

この建物は、明治41年(1908)に青森大林区署(のちの青森営林局)庁舎として建設されたが、営林局庁舎が新築される際、青森市が旧庁舎の本館部分を保存し、博物館として転用したものであった。当時の建築技術を考える上でも貴重な建物であると感じ、館内を巡ると県内林業の活発な当時の様子を勉強できる博物館であった。

■施設見学での視察内容

- ・森林に棲む小動物・森の生態系・森を構成している樹木(葉・幹・根)の働き
- ・森林資源の現状や、住宅・パルプ・木製品・木の加工技術等について
- ・森林の管理や調査に利用してきたスキーの実物が展示されており、青森県のスキーの発達史と普及に努めた人々について
- ・ヒバの生理・生態・分布と特徴についての展示。ヒバの研究者“故 松川恭佐”氏の功績などを模型で解説し、またヒバ材利用の古建築と近代化建築を写真で紹介されていた。ヒバ材の資源活用と保護育成及び有効活用の必要性が認識出来る解説であった
- ・津軽森林鉄道の展示コーナーでは、当時使用されたレールや蒸気機関車の大型写真、鉄道の建設や運行、周辺地区の移り変わりを紹介したパネル展示があり、森林博物館周辺が「津軽森林鉄道」を軸とした木材の流通拠点として、一時代を築いた時代を学んだ
- ・映画「八甲田山」のロケにも使われた、明治の雰囲気を残す旧営林局長室が、ロケで使用される経緯などを解説頂いた

廣報費

(その3)

政務活動報告書

会派名	松の会		
活動議員名 (取扱議員名)			
戸来伝	山田洋子	竹島直樹	
区分			
1 調査研究費	2 研修費	3 広報費	4 広聴費
5 要請・陳情活動費	6 会議費	7 資料作成費	8 資料購入費
9 人件費	10 事務所費	※該当する区分に○印	
期間 (年月日)	令和 6年 1月 11日 ~ 令和 6年 2月 29日 (泊日)		
支出目的 (支出理由)	市民への市政報告会ならびに市民との意見交換会のため 令和6年1月11日 みどり会館 2月5日 一本木沢町内会 2月15日 六日町町内会 2月29日 新川原町内会		
用務先 (支払先)	会場費 1月11日 みどり会館運営委員会4500円 参加人数20人 2月5日 一本木沢町内会3000円 参加人数15人 2月15日 六日町町内会5000円 参加人数33人 2月29日 新川原町内会3500円 参加人数23人 資料作成費 1月11日 印刷代4000円 2月5日 印刷代4000円 2月15日 印刷代4000円 2月29日 印刷代4000円 茶菓子代 1月11日 4561円 2月5日 3196円 2月29日 3196円		
内容及び成果			
※領収書及び料金内訳書等の写しは裏面へ貼り付けしてください。			